

シンポジウム・口承文芸の「発生」と「創造」

タトエ話の伝承世界

—宮城県気仙沼地方の事例から—

川島 秀一

一、「タトエ話」という民俗語彙

本稿では、主に宮城県の気仙沼地方に伝えられている「タトエ話」と呼ばれている話の事例報告を試みながら、このようなハナシが、どのような場で生まれ、どのような伝承のありかたをしているのかを探ってみることを主眼としている。

まず、「タトエ話」という民俗語彙について捉えておきたい。これまでの先行の研究でも、たとえば、白田甚五郎の「民話の生誕・伝承」⁽¹⁾においては「たとへ」、米谷陽一の「ハナシからタトエへ・タトエからハナシへ」⁽²⁾においては「タトエバナシ」という民俗語彙が採集されている。前者では、佐渡の片野尾という漁村、後者では、千葉県浦安の漁師マチが調査地であったことにも興味がひかれるが、本稿でも三陸の漁村が主な舞台となる。ただし、本稿では、限られた地域における採録資料に留まらず、東北地方で「字」を単位とする集落（ここではムラと表記する）を越えて変移し、伝承されていることに注意をしな

がら、この「タトエ話」を捉えなおしていきたいと思う。

まず、その気仙沼地方では、どのように「タトエ話」という語彙が使われているのかを、この地方の老人クラブで編集した文献資料の事例から挙げてみたい。「鯉船の飯焼き弥助の傑作」という表題の事実譚で、飯炊き（カシキ）の弥助がハナシの主人公である。

次に風を横に受けて間切って走っていると、船側で弥助が釜を洗つてるので、誰かが弥助釜を落すなよと大きな声で叫ぶと、弥助トックにトックにと、声をかけられたときは釜はすでに海の底へ、此の弥助の釜は、後世例えば人混みの中などでスリに注意するようにと言うと、すでにそれ以前に盗られてしまっている事などに使われる例話⁽³⁾になっている。

この事例は「弥助の釜」と呼ばれるタトエであるが、モノを亡くしたり取られたりしないように注意をされたときに、すでにモノを亡くしたり取られたりしている状況を指すのに、このタトエが使われているようである。およそ、口頭で語られる場合にも、「タトエ話」という言葉はこの事例のような使われ方がされ、「タトエ話にね…」とか「タトエにね…」という出だしでこのようなハナシが話され、あるいはこの事例のように、ハナシの結びに「タトエ話」という言葉が使われることが多い。タトエ話がほぼタトエと同じような使われかたをされることも注意されるが、本稿では、ハナシとして成立しているもの、しかも特異なことを行なった人物の出来事をモチーフとするよう

なハナシだけを、とりあえず「タトエ話」として扱うことにする。それは、神谷吉行が「幡多郡諺考―世間話における諺の伝承基盤」⁽⁴⁾で、高知県幡多郡の調査において明らかにしたように、「実在人物の特異な言動が土地の笑話や世間話の主人公に定着して、それらの咄から新たな諺を生ずる傾向」を捉えることであり、さらに、それらの作り上げられた「諺」(タトエ話)が、どのように伝承されるかを、ここでは問うていきたい。

さて、この「弥助の釜」と同様の話は、そのタトエ話の主人公の固有名詞を違えて、「センマの釜」というタトエで、岩手県の大船渡地方で、次のようなハナシとして伝えられている。やはり、カツオ船での、ある出来事として語られている。

あるとき、こんな話があったんです。センマという子供だったらしんだが、たいがい昔が、カシキという炊事当番の者が水夫の中でも一番若い者がやったもんだから、そのセンマが、カツオ船から小舟を出して、その脇から海で釜を洗ってだ。そうすつというど、そいづが洗ってるうちに手からはずして落としてしまった。本当に大事な物を落としてしまったから、「落とした」って言えねかったわけ。ふんで、どうしたらいいなと思つて、自分で悩んでおつた。それを見てたフナカタ(船員)が「センマ、釜は？」と、こういうふうなハナシ言つたつてね。そしたら、「いつつに(早くに)落としてしまった」ということを言つた。そして、釜を洗わねで、言うに言われねから、自分の手、洗つてだつたつて。そして、

海の底さ指さしたつていうハナシがあるんだがね。⁽⁵⁾

弥助が「トツクに」と言い、センマが「いつつに」と言つてはいるが、この二つの話は同型の話である。もともと、船では、釜などの金物を海に落とすことはタブーとしていた。おそらく、これらの「カシキが釜を落とした話」は、カシキが釜を落とさぬように、一種の教訓としても語られたものと思われる。笑話の主人公にされた弥助やセンマのような笑われ者にならないように、この話を聞いて気を付けたのが、カツオ船のカシキたちであつた。

二、「弥惣馬放したような話」

先の二つの事例は、同型のハナシが、遠く離れたところで、主人公名を変えて伝わっていた「タトエ話」の例であるが、次の事例は、タトエとして有名な名前の人物が、少し離れた土地に実在の人物としても同時に存在していた例である。

現在、気仙沼市に含まれている新月村の『新月村誌』⁽⁶⁾には、「俚諺」の項目に、「弥惣馬放したような話」という俚諺(タトエ)が載っている。このタトエについて、再調査を試みたところ、新月村の台では、「弥惣馬放したようだ」とか「弥惣さんのようだ」という意味は、弥惣が馬を放してしまつても追うこともしなかつたことから生まれたそうで、「ホテナシ」とか「アホンとしている」人のことを指すという。弥惣はこの家の人

なのか、わからないとも伝えて⁷⁾いる。

ところが、同じ新月村の細尾の尾形文吾翁（明治四十二年生まれ）によると、そもそもこのタトエは、「弥惣馬放したようだ。米の飯食った」と言われていたもので、「弥惣馬放して、米の飯食ったようなハナシ語んなや」などという使われかたがされるという。しかも、弥惣は、細尾に住んでいた実在の人物であったという。

この弥惣は、馬屋から馬を逃がしてしまったが、村の皆でおさえてくれたために、村人に赤腕で米の飯を御馳走したという。わけのわからない人や小馬鹿くさい人のことを指して、「弥惣馬放して、米の飯食ったような話語んなや」と言うような使われ方がされるが、その話とは、とんちんかんな話を指したという。しかも、この弥惣は正直者であったために、厄神様が宿った人間でもあり、この厄神様がおしていった手形をちぎってから煎じて病人に飲ませ、その方法によって病気を治すことのできるハヤリ神様として、近在に名が知れ渡った人であった⁸⁾。

ところが、気仙沼の漁村の一つである小々汐には、もう一人の弥惣がいた。そのタトエの使われかたも、ほぼ同じである。

小々汐の尾形栄七翁（明治四十一年生まれ）によると、弥惣がシロカキに馬を連れていったところ、どこで馬を放したかわからないうちに、逃がしてしまっただけという。そのために、わけのわからないことを語る人のことを「弥惣馬ツコ放したようだ」と語るといふ。この弥惣は、破天荒な人物で、木登りをして小

便をしたり、意地をはって弁当の御飯に砂をかけて食べたりした人であった。弥惣の家では、よく馬を逃がすことがあり、この家のある代のおばあさんが心を患っていたときに、「弥惣馬ツコ来た」とか「弥惣馬ツコ放した」などと、うわ言を語ったこともあったという⁹⁾。

「弥惣馬放したような話」というタトエは、今でこそ笑話のように話されるタトエであるが、細尾や小々汐の事例から考えると、以前には何かもつと深く、民間信仰の世界に組み込まれていた言葉であったのかもしれない。また、このような、ある種異常な人物であったからこそ、タトエ話の主人公にも成り得たとも思われる。

ただし、同時に「馬を放したようなハナシ」という語呂合わせとしての魅力が一人歩きを始めて、「不確かな話」という意味とともに、人の口に乗ったことも確かである。つまり、実在の人物から離れ、タトエとして「タトエ話」から切り離されて伝承されていくことになる。

たとえば、気仙沼市の大島では、弥惣が弥兵衛に変化している。「弥兵衛、馬放したようだ」と言えば、わけのわからないことを語ることや、モト（本）もウラ（末）もないような話のことをいう。しかし、弥兵衛とはどこの人か、わからないともいう¹⁰⁾。また、同じ大島で「ヤ（野）さ、馬放したようなこと語んな」と言われるタトエとは、必要でもない、面白いことを語る人を指すときに使われるという¹¹⁾。もはや、弥惣という一人の

実在した人物を思い出されることもなく、固有名詞の「弥惣」が一般名詞の「野さ」に変換されて伝えられている。

この例のように、タトエの中の固有名詞が、一般名詞に変換した例はほかにもある。大島には明治六年（一八七三）生まれの村上伊兵衛と呼ばれる著名なホラ語りがいた。その者のことを「伊兵衛ホラ」と呼び、大きなホラを語ることを「伊兵衛ホラ(12)のようだ」とも、タトエとして使われていた。ところが、大島の対岸の、階上村（気仙沼市）では、「イエイホラ」とは、自分が死んだふりをして、香典代をだましとる嘘のことを指すのだといい、「位牌ホラ」のことだと伝えている。この例なども、固有名詞が一般名詞の中に溶け込んでしまった例として注意される。

三、「ツの国の婆さん」

さて、気仙沼地方では、実在の人物以外にもタトエ話が成立することがある。たとえば、「ツの国の婆さんのようだ」というタトエを、よく耳にすることができる。

これは、「渡辺綱の鬼退治」の話の中に登場する、綱の「撰津の国の乳母」の名前のことであるが、「ツの国の婆さん」のようだと言えば、その元となる渡辺綱の話を知らなくても、それぞれのムラで、タトエとして、その主なる意味を違えて伝えられている。

たとえば、小々汐の尾形榮七翁の伝承では、次のように「渡辺綱の話」と、その話から生まれたタトエを伝えている。

キンジン草（キンジン草・ユキノシタ）というのはつき、昔、渡辺の綱つついう人が、大山の酒呑童子という鬼を退治したとき、ケエナ（腕）を一本、もいできたつてね。その酒呑童子という鬼が、ツの国の婆様になってきて、「渡辺や〜、そのケエナ、俺に見せろ」と言つたんで、「なに、婆さん、オメ、鬼のケエナなんて見たら、たんまげで（驚いて）しまうから見せられね」つて言つた。そしたら婆様「オメが小さいとき、俺、小便かけられたり、ボンコひっかけられたり、鼻汁を口ですすつたりして、おがした。その俺さ見せねで、誰さ見せる〜」つて言つた。「ほんならば見せつから」つて、チロツと見せたら、「手さ取つて見せろや」つて言うから、手さやつたら、その酒呑童子という鬼が、突然、破風から逃げていったんだつてね。それで、渡辺家には破風ねんだとね。その酒呑童子という鬼が、山さ行つて、ケエナを付けるものがねえから、その草のイトブキを貼つて治した。ほんで、キンジン草という。また、よく昔のことを持ち出して語る人のことを「ツの国の婆さんのようだ」と言つ(13)。

この話にはタトエが生まれるためのタトエ話としての「渡辺綱の話」としてばかりでなく、初夏に鬼の角や牙のような形に白い花を咲かせるユキノシタをキンジンソウ（傷草）と語るようになった理由や、その草のワタを用いて傷口に付けるように

なつた理由の由来譚としても語られている。

ここでは、「ツの国の婆さん」とは、「よく昔のことを持ち出して語る人」のことを指し、それはこの婆様に化けた鬼が、自分の切られた腕を綱から奪い返すために、綱に昔のことを語って籠絡させたことに対応するタトエになっている。

また、気仙沼市の大島では、「ツの国の婆さんのようだ」とは、「話上手で人をだます者」のことを言い、あるいは遠方からシニルイのお婆さんが来たときに「ツの国の婆さんが来た」と言った。さらに、婚礼のお振舞が終わりかけたときに、その家の婆さんが出てきて、仲人などに酒を注ぐ口上に「ツの国の婆ばあ、参りましたから」と語る。この例などは、酒を飲んでしまつて、いつまでも帰らない客に対して、両者共に気まずい思いをさせないで退散させるに効果的な言葉であつたという。これらは、いずれも「渡辺綱の鬼退治」の話から生まれたタトエであろうが、特別にこの話も伝承されているわけではなかった。

四、タトエ話の生成と機能

タトエ話は、話の結句に「それで○○のようなことを○○というのだ」と語られる話であり、その「○○」(某)とは実在の人物であることが多い。しかし、この「ツの国の婆さん」のように、架空の人物でもタトエになることがあるとするならば、そのタトエを説明する「渡辺綱の鬼退治」の話は、一種の「タ

トエ話」としても捉えることができるだろう。

もちろん、タトエ話の枠を広げて考えてみれば、気仙沼地方で、三番目の娘は機転がきくという意味のタトエである「三番目は猿さかしい」は「猿掣入」の昔話から、思いがけないものを食べたときのタトエとしての「犬コのおかけでシ汁食つた」は「花咲爺」の昔話から生まれたものである。しかし、タトエ話は、あくまで固有名詞をもつた者の話として捉えたほうが、その特性が明確になると思われる。

そして、世間話に登場するような実在の人物だけでなく、「ツの国の婆さん」のような伝説上の人物名も、生活に密着したかたちでタトエになることも、同時に捉えていかなければならないものと思われる。伝説上の架空人物名が、現実の生活に引き寄せられて語ること、実在の人物が活躍する世間話がタトエを生むことと同様の経路をベースとしているからである。つまり、タトエ話を広く捉え直すとすれば、現実のある状況を、世間話や伝説の主人公が起こした出来事にたとえて語るといふ、その伝承世界において、初めて、たとえられた方の話が「タトエ話」として機能するわけである。

伝説のある土地に根付かせる力の一つに、宗教的職能者による発話が今までは注目されてきた。しかし、宗教的職能者の発話を受け容れる側の問題、たとえば、伝説上の人物を身近に感じていたいという側面に関しては、タトエ話を生んでいく伝承世界も考慮しなければならないであろう。先に紹介した

「弥惣馬放したような話」も、初めには別の伝説上の「弥惣」があったものかもしれない。もとになる話が忘れ去られ、「弥惣馬放したような話」というタトエだけが残り、それが細尾と小々汐という二つの離れた集落で、身近な人物に特定されて、新たなタトエ話として生成していったことも十分、考えられるからである。

また、以上のような、タトエ話から生まれた、その土地特有のタトエは、単なる教訓や笑いの手段にするだけでなく、とある状況を瞬時に伝えるに有効な方法でもあった。たとえば、「ヤエンツアマのイモ売り」というタトエは、かつて、気仙沼湾内で、舟にイモを積み入れ、旗を立てておき、往来する漁船にイモを売っていたヤエンツアマという者に対する世間話（タトエ話）から生まれている。この人は同じ代金を払っても、後で行くほどイモを少なく渡すために、分け前が、だんだん少なくなることを「ヤエンツアマのイモ売り」と語られた。このタトエは、沖で網にかかる魚が曳くごとに少なくなってきたときなどにも、「おい、ヤエンツアマだぞ」と語るだけで、笑いと同時に、その状況を的確に伝えることができたそうである。特に、他の漁船と競合しながら、一刻一刻に機転をきかせて、他の船より早く状況判断をして、しかもそれを他にさとられずに実行しなければならぬ漁業の現場においては、これらのタトエが重宝がられたことも確かであろう。

「タトエ話」という民俗語彙に含まれている内実を、もう少

し深めてみたいと思われる理由は、以上のように、現在の生活の中にも溶け込んでいる伝承世界であるということと、今後も、タトエが必要な生業が続く限り、新しいタトエとその背景になる「タトエ話」が生まれてくる可能性があると思われることである。一地域に限らず、広く事例を集めながら考えていきたいテーマの一つである。

注

- (1) 白田甚五郎「民話の生誕・伝承」〔国文学解釈と鑑賞〕五一七号所収）至文堂・一九七五年
- (2) 米谷陽一「ハナシからタトエへ・タトエからハナシへ」〔野村純一編『昔話伝説研究の展開』所収）三弥井書店・一九九五年
- (3) 尾形熊治郎「鯉船の飯焚き弥助の傑作」〔松岩百話集』所収）松岩地区老人クラブ・一九七三年
- (4) 神谷吉行「幡多郡諺断考」〔白田甚五郎編『口承文芸の総合研究』所収）三弥井書店・一九七四年
- (5) 一九九七年三月九日、岩手県大船渡市三陸町根白の寺沢三郎翁（大正二年生まれ）より採録。
- (6) 『新月村誌』・新月村・一九五七年
- (7) 一九九一年十一月二日、気仙沼市台の吉田勝男翁（明治三十六年生まれ）より聞書。
- (8) 一九九一年十一月三十日、尾形文吾翁より聞書。

(9) 一九九一年十月三十一日、尾形栄七翁より聞書。

(10) 一九九二年六月十九日、気仙沼市浦ノ浜の小松きくの嬢(明治三十八年生まれ)より聞書。

(11) 一九九二年六月五日、気仙沼市亀山の村上みよし嬢(明治三十五年生まれ)より聞書。

(12) 「伊兵衛ホラ」のことについては、川島秀一「漁村と伝承」(12) ホラ話の伝承」(『漁村』第五十二巻第十一号・漁村文化協会・一九八六年)にまとめた。

(13) 一九八四年八月二十日、尾形栄七翁より採録。
(かわしま・しゅういち／気仙沼市図書館)

シンポジウム・口承文芸の「発生」と「創造」

目の想像力／耳の想像力

— 語彙研究の可能性 —

山田 巖子

はじめに

二〇〇三年には『日本妖怪学大全』(小松和彦編 小学館)『怪異学の技法』(東アジア怪異学会編 臨川書房)の二冊が上梓され、怪異研究は活況を呈しているかに見える。しかしそれらはいずれもあらかじめ「怪異」として囲い込んだものを考察しており、どのようなものが「怪異」として現われてくるのか、といった視点には欠けていると言わねばならない。また、前者は、画像や文献といった目によつて捉えられるものと、聞き書き資料といった耳によつて捉えられたものと同じ土俵で論じること、むしろ問題を見えにくくしている(小松 二〇〇三)。民俗学研究の立場からいえば、対象を固定したものと捉えがちな文献学や画像学からは距離をとり、既刊の資料を、日常の中で生起するものの一過性の姿として捉え直すことが求められているといえる。

一九三八年の『民間伝承』三巻十号に掲載された柳田国男の